琉球大学学術リポジトリ

久米島・上江洲家文書中の「首里王府・久米島往復文書控」について

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-10-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 豊見山, 和行, Tomiyama, Kazuyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2205

久米島・上江洲家文書中の「首里王府・久米島往復文書控」について

Reprint about "The duplicate of the both-way document between Ryukyu dynasty, the Shuri Ouf and the district public office of Kumejima Island" in the UEZU document, Kumejima Island

豊見山　和　行

Kazuyuki TOMIYAMA

1

近世琉球における租税制度（広く言えば、年貢の負担体系）に関する研究には、1980年代の安良城盛昭『新・沖縄史論』（沖縄タイムス社、1980年）以降、やや研究の停滞状況が続いた。しかしながら、近年の山本弘文『南島経済史の研究』（法政大学出版局、1999年）、そして昨年刊行された、沖縄国際大学南島文化研究所編『近世琉球の租税制度と人頭税』（日本経済評論社、2003年）によって新たな研究段階を画する研究成果が生み出さつつあると言えよう。

とりわけ、後者所収の来間泰男「近世先島の人頭税と琉球の租税制」は、近代初頭の「旧慣租税制度」の調査報告を縦横に駆使し、近世琉球へ遡及する方法論を用い、さらに安良城盛昭・山本弘文両氏の研究を踏まえることで、近世琉球における租税制度の全体像へ迫ろうとする斬新な論点を提示している。

来間氏は、山本氏の研究に依拠しつつ、近世琉球には石高制は機能せず、古琉球以来の租税制度の下にあったこと、人頭税制の基本は「夫遣い」（夫役、労役）によるものであることを強調している。来間氏のこのような理解にはおおよそ了解される点も多いが、近世琉球の租税制度（負担体系）において石高制はまったく機能しなかったという点は再考を要する問題だと思われる。

小論の目的は、近年の租税制度研究において、旧来看過されてきた久米島の年貢関係の史料を紹介することによって、近世琉球の租税制度を解明するための素材を提供することにある。

2

史料の書誌的紹介を行うと、「首里王府・久米島往復文書控」（仮題）は、久米島上江洲家文書にかかる家文書である。近年、上江洲家文書の整理が進展し、「上江洲家文書目録」では、「首里王府・久米島往復文書控」は第146号文書である。文書の形状は冊子体である（全56帖）。本史料は、31点の文書からなっている。便宜上、それぞれに文書番号を付して区別できるようにした。

本史料の特徴は以下の諸点にある。形式の側面からみると、第一に、年欠であるため、その確定が必要となる。[15] 号文書において「去々戌年冠船御渡来」とある、この戌年冠船とは1838年（道光18）の尚育冊封を指すものである。そのことから、[15] 号文書の「子」年とは、1840年（道光20年庚子）となる。以下に記載のある「丑年」は道光21年辛丑（1841年）である。以上のことから、本史料の多くは1840年から1841年にかけての文書であることが分かる。

琉球大学教育学部生涯教育課程

第二に、本史料の主体は久米島の蔵元と首里王府の往復文書であるが、久米島側からの上申文書が大半を占めていること。

第三に、間切による借用証文（5・6・7・11・12・29号）や王府への借用願い文書（15号）という独特の文書が存在すること。

さらに内容の側面からみると、第一に、織布・染め具関係が多いこと（1・10・14・17・19・20・22・24・26・30号）。

第二に、年貢の未納関係およびその返済を督促する文書が存在すること（4・25号）。

第三に、仲里間切・具志川間切それぞれが使用する間切経費を把握できる文書が存在すること（16号）。やや具体的に示すと、仲里間切は、6反帆船1艘の造船費用（釘、錠などの材料費、大工の使用賃金など）、御用布製作にかかる品目（筋糸、藍玉、蘇木、明礬、干し爵金）の金額、農具の仕立て料金、雄牛28頭・雌牛75頭の代金などからなり、合計で銭7万8,312貫500文が算出されている。同様に、具志川間切の分は、ほぼ同様の品目で合計銭7万893貫文となっている。これらの品目の種類と金額は、どのように徴収されたかは不明な点が多いが、間切行政において公的な支出とてして計上された点は間違いないものと思われるが、その歴史的な意味あいについては、今後の課題として残されている。なお、虫損等で判読不明の部分は□[　]で示した。

3　史料本文「首里王府・久米島往復文書控」

[1]

浦添御殿重御免銀并国吉殿内御所望として本行之めんす来夏便迄皆同積登上納仕候様、御調文を以被仰渡趣、委曲承知仕、此程私共出会段々為尽吟味事御座候へ共、当島之儀頃年津波旱魃等之逢災変二一統極々疲行、人居太分相減り候上、津波以来桑及憔悴、蚕子飼立方段々行届不申候、多分綿子致不出来、年々定式諸御用紬調綿子も毎度拝借之願申上、漸追送を以相調上納仕来候振合御座候故、島元出産之高二而ハ右御用并御所望何分尽工面候而も全相弁候体二而ハ相見得不申、至極驚入居申事御座候、依之願申上候儀、御成合之程も如何敷深重奉恐入候得共、前文之次第別段之御取計を以何卒本行之綿子御免被仰付被下度奉願候、此等之趣何分二も宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子
十一月

久米仲里間切大掟
比嘉にや

同首里大屋子
比嘉筑登之

同地頭代
宇江城親雲上

具志川間切大掟
喜久里にや

同首里大屋子
上江洲筑登之

同地頭代
上江洲親雲上

本書之通、両間切共頃年極々疲入、人居少相成候上、桑及憔悴二年々綿子致不出来、定式御用布調めんす茂毎度拝借を以漸御用之□合申体二而、右御用めんす調方及手式不申段見及□（候カ）間、何卒願通御達被下度奉存候、以上、

子
十一月

久米両間切在番
筆者

同間切
在番

鉢嶺親雲上

御所帯方
御物奉行所

[2]

覚　御（ケシ）印

久米両間切之儀、多年疲入百姓共及難儀候付、諸事為下知方当春鉢嶺親雲上渡海被仰付候処、筆者不罷居差支候間、筆者両人被召付度旨申出趣有之候、然ハ右両間切所中為下知方去ル卯年被召付置候処、当分ハ諸篇鉢嶺手元ニ而差引仕事候間、右筆者之儀両人共鉢嶺江相付候様可被仰付事、

子十一月廿七日　　富島親雲上

右通言上相済候間、可被得其意候、以上、

子十一月廿七日　　豊平親方

鉢嶺親雲上　　久米両間切 在番　　同間切 筆者

[3]

○覚　　久米仲里間切

一やくかいから弐千九百拾五甲

一白らかいから九拾四枚

一やくかいから弐千弐百四拾壱甲　　同具志川間切

一白らかいから六拾四枚

右、江戸立御道具遣用之具仕立ニ付、去ル年十月十九日手形入被仰付、此程段々座催促、印紙催促等仕候得共、手形表于今一ゑん納方無之、至極御用支相成申候間、押舟ニ而急度皆同相納候様被仰付可被下候、以上、

丑正月　　具摺奉行所 兼本里之子　　同 仲本里之子親雲上

[4]

○覚

申年諸出米差引、現納三石弐斗三升壱合七勺九才起之内未進
一米弐斗三升壱合七勺九才起、

右同利、酉年より子年迄四ヶ年分
一同弐斗三升壱合七勺九才起　　外三石起納ル、

申年未進
一雑石壱石三斗七升七合六才起、

右同利、酉年より子年迄四ヶ年分
一同壱石三斗七升七合六才起、

酉年未進
一米四斗五升七合九勺壱才起、

右同利、戌年より子年迄三ヶ年分
一同三斗四升三合四勺三才起　　外弐石七斗七升三合八勺八才、

酉年未進
一雑石壱石三斗七升七合六才起、

右同利、戌年より子年迄三ヶ年分
一同壱石三升弐合七勺九才起、

戌年未進
一同壱石三斗七升七合六勺六才起、

右同利、亥年より子年迄弐ヶ年分
一同六斗八升八合五勺三才起、

亥年御用意出米減少被仰付候付諸出米差引現納三石五斗三升弐合五勺九才之内未進
一米三石弐と六升四合三勺四才起、

右同利、子年壱ヶ年分
一同八斗壱升六合八才起　　外弐斗六升八合弐勺壱才起納ル、

亥年未進
一同三斗四升四合弐勺六才起、

子年未進
一米三石五斗三升弐合五勺五才起、

同年右同
一雑石壱石三斗七升七合六才起、

申年より去年迄惣夫銭未進五ヶ年分
一銭千三百弐拾貫文、

右同之利
一同千八拾五貫四拾文

同年より去年迄五ヶ年分悴者夫銭未進
一同八百五拾五貫文、

右同利
一同七百五拾壱貫五拾文、
〆米八石八斗七升七合八勺九才起、
〆雑石拾石三斗弐升七合九勺四才起、
〆銭四千拾壱貫九拾文
右之通、地頭所作得・夫銭及不納、此程段々催促申越候得共埒明不申、至極差迫罷在申候間、乍御厄害急度致皆納候様被仰渡被下度、奉頼候、以上、
丑正月　　仲地親雲上

[5]
○證文
銭五百貫文　　但、拾わり利、
但、本利二而五百五拾貫文返納仕置事、
右西平殿内御入用として御借慥二請取申候、御返弁之儀来ル十五日限元利共堅固二首尾方可仕候、自然相違之儀共有之候ハヽ、口入人二而引請、無間違御付届可仕候、為後証如斯御座候、以上、

丑二月　　借主久米具志川間切嘉手苅目差　与世山にや　　同西銘掟　上江洲にや

口入あ□[illegible]ノ　あや前

当間小ノ　はんし

[6]
○證文　　久米具志川間切
銭弐万貫文

右農具并御用布調用之諸道具調用として拝借、慥ニ請取申候、返上方之儀ハ来ル未年より先、年々五千貫文ツヽ無利ニして返上可仕候、為後証如斯御座候、以上、

丑
二月　　嘉手苅村目差　与世山にや　　地頭代　上江洲親雲上
宮古御蔵

[7]

○證文　　久米具志川間切

銭弐万貫文

右農具并御用布調用之諸道具調用として拝借、慥ニ請取申候、返上方之儀ハ来ル未年より先、年々五千貫文ツヽ無利ニして返上可仕候、為後証如斯御座候、以上、

丑
二月　　嘉手苅村目差　与世山にや　　地頭代　上江洲親雲上
取納座

[8]

覚

去年上納米残不納之儀ニ付、取納座御方より段々御懸引之趣有之候間、急度取〆現米又ハ諸品成共何分賦書取添差登候様、被御申越趣有之、我々始百姓中出会折角取〆仕事候得とも未取円メ不申、追々取入賦書を以差登候間、宜様御差通御申上度奉存候、御歳暮立船只今出帆ニ付、荒々如斯御座候、以上、

丑
二月十一日　　久米具志川間切　大掟　首里大屋子　　地頭代足　山里親雲上

地頭代
上江洲親雲上

[9]

粟国島出来綿子之内年々百五拾把完、其島江寄拝借被仰付置候處、右綿子今来年之分者御用有之、越前綿子ニ繰替相渡候間其心得可有之候、此段致問合候、以上、

丑
二月　　豊見山親雲上　富島親方

久米両間切
在番

[10]

口上覚

「此節御用意御方御差出シ候処、両間切出産之綿子取〆委細賦帒を以可申出旨御差［　］候」

最初訟表三百把之内
一綿子百弐拾把　　外百八拾把、

此節重御調文之内かすり島白紬三拾五反調用
一同四拾壱把四拾匁、

〆綿子百六拾壱把四拾匁、

最初訟表弐百三拾五把三拾匁之内
一綿子百拾五把三拾匁　　具志川間切

外百弐拾把、

此節重御調文之内かすり島白紬弐拾三反調用
一同弐拾七把六拾匁、
〆綿子百四拾弐把九拾匁、

右者恐多御座候得共申上候、両間切諸御用紬調差上候之儀、去秋・当春之出来高等例年之成を以取立候得者、太分不足ニ付先達而拝借之願申上候処、御物御有合無御座由ニ而、外書之員数完叵有被下置候付、早速仲里間切大掟宇江城にや江相渡不足分ハ屹与下知方を以調出、御用全相調候様書面取添委細申含差下申候処、猶又大美御殿御用并諸士御免銀、又ハ大和人衆御所望紬御調文相重候上、今般之儀ハ殊之外桑葉咲遅ニ付、蚕子出産相違ひ今小虫之事ニ而出来不出来之程合不相見得、殊ニ綿子出来方も四月初比より出始申見及ニ而其内之仕事無之差支候段、島元より申越趣有之、至極驚入居申候、依之御時節柄をも不顧訟ヶ間敷申上候儀、近比御都合之程茂如何敷千万恐入奉存候得共、此涯拝借之不奉蒙御陰候而ハ別ニ才覚之手便不罷成、大切成御用差欠候次第御座候間、前文之趣別条之御取分を以何卒本行之員数完拝借被成下度偏奉願候、左様被仰付被下候ハヽ返上方之儀ハ当夏御用紬仕賃米ニ而堅固ニ御引合上納可仕候、此旨可然様被仰上被下儀奉頼候、以上、

丑
三月　　仲里間切真謝掟
上江洲にや　　同地頭代
宇江城親雲上

具志川間切嘉手苅目差
与世山にや　　同地頭代
上江洲親雲上

右申出之通綿子及不足、只今より仕事支相成候段申越趣有之、至私共ニも至極心配仕事御座候間、何とそ願通御達被下度奉存候、以上、

丑
三月　　仲里間切在番筆者
具志堅筑登之親雲上　　具志川間切在番筆者
具志堅筑登之親雲上
鉢嶺親雲上

[11]

證文

久米両間切当年貢米之儀、随分下知方を以皆同上納可仕候、尤去年貢残并未進之儀ハ御当地ニ而者叵取究御座候間、下島之上委ク取〆成長上納仕させ、残分ハ賦書を以首尾可申上候、若相違之儀共御座候ハヽ其沙汰可被仰付候、為後證如斯御座候、以上、

丑
三月　　久米両間切
地頭代

右申出之通、当年貢屹与下島之上屹与下知方を以皆納仕させ、去年貢残并未進之儀ハ下島之上厳重取〆其首尾可申上候、以上、

丑
三月　　両間切在番
筆者　　鉢嶺親雲上

[12]

證文

仲地親雲上御作得米并夫銭之儀、太分及不納ニ候付屹与皆納仕候様被仰渡趣奉承知候、右ニ付而ハ下島之上厳重取〆上納仕、残分ハ賦書を以首尾可申上候、若相違之儀共御座候ハヽ其沙汰可被仰付候、為後證如斯御座候、以上、

丑　　具志川間切
三月　　地頭代
右申出之通、下島之上屹与下知方を以皆納仕させ、其首尾可申上候、以上、

丑　　両間切
三月　　筆者　　鉢嶺親雲上

[13]
船頭壱人ツヽ御雇被仰付、左候而勲功之儀ハ楷船佐事等之功労御取持被仰付度奉願候、左様御達被下候ハヽ飯米故実ハ間切向を以相渡可申候、此旨何分ニも宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子　　久米具志川間切地頭代　　同仲里間切地頭代
十二月　　上江洲親雲上　　宇江城親雲上
右申出之通船作事仕候而も両間切船方之者共迄ニ而ハ船乗方行届不申段、見及申候間、何卒願通御達被下度奉存候、以上、

子
十二月　　鉢嶺親雲上

[14]
口上覚
干おきん弐百三拾斤
内　百五拾斤　　仲里間切
　　八拾斤　　具志川間切
右ハ乍恐申上候、当島諸御用紬染具おきん之儀、近年旱勝打続候故、都而枯損年々所望被成下候御陰を以漸御用相弁申候處、来年よりハ江戸立并御上国御用太分之御用布高ニ而染具見賦り一ゑん無之、至極驚入居申事御座候間、別条之御取分ケを以何卒本行内書之員数完、代銭差寄□所望被成下度奉願候、此旨宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子　　久米具志川間切地頭代　　同仲里間切地頭代
十二月　　上江洲親雲上　　宇江城親雲上
右申出之通太分之御用布高、染具及不足ニ申候間、何卒願通御達被下度奉存候、以上、

子
十二月　　鉢嶺親雲上

[15]
口上覚
銭拾四万九千弐百五貫五百文
内
七万八千三百拾弐貫五百文
七万八百九拾三貫文
右者恐多千万奉存候得共、久米両間切之儀、年来疲入年貢・諸上納物調兼候處、去々戌年冠船御渡来ニ付而ハ、例外之御用段々相重め極々難儀之体成立、船作事等相調候儀不罷成、諸上納物積登毎度雇船を以運送仕候付、運賃諸雑費太分引負、夫故御用布調用之諸品、其外農具買求方等も思様不相調、田畠耕方差支、尤牛之儀農事第一之物ニ而候處、是又求方不行届、色々尽吟味候得共、現銭之出先一ゑん無之、右ニ付而ハ先様年貢諸上納物懸而、江戸立并
中城御殿御上国御用之御反布如何相調可申哉、夜白心配仕居申候、依之奉訟候儀当御時節柄別而御都

合之程も如何敷千万恐多奉存候得共、前文之次第□□□疲労之百姓等御憐愍ニ被思召上、本行之員数ハ御用意・御所帯御両所より拝借被成下御取救被仰付被下度奉願候、左様御達被下候ハヽ御陰を以船作事并農具取仕立、牛買求、所帯柄見合、困窮之者共江相渡シ、左候而私共ニも夜白下知方を以年貢諸上納物懸而江戸立并御上国御用之御反布随分御用支無之様、全相弁申度念望ニ而此等之段、御訟申上事御座候間、何とそ願之通御達被下度千万奉願候、左候ハヽ返上方之儀ハ御上国翌年より年府を以上納仕候様被仰付被下度是又奉願候、此等之節を以幾重ニも可然様御取成被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子
十二月

久米具志川間切大掟
山元にや

同首里大屋子
喜久里筑登之

同　地頭代
上江洲親雲上

同中里間切大掟
宇江城にや

同首里大屋子
比嘉筑登之

同地頭代
宇江城親雲上

右通人居少ク年貢之働懸而江戸立并御上国御用何共不及手式次第御座候条、疲之百姓御救ニ被思召上、何卒願之通被仰付被下度奉存候、以上、

子
十二月

具志川間切在番筆者
具志堅筑登之親雲上

仲里間切在番筆者
具志堅筑登之親雲上

同　在番
太田里之子親雲上
鉢嶺親雲上

同　在番
與那覇里之子親雲上

右願出之通、両間切之儀極々疲入、当分重役等被召立折角疲労立直り候手筋致差引候最中、格別之御取分ケを以何とそ願筋御取揚被下度奉存候、以上、

子
十二月

両間切
両惣地頭

「本文遂披露候処、当節御蔵方極御難渋之砌、容易ニ御取揚被仰付候得共、年来疲入年貢・諸上納物、且江戸立御用并
中城王子様御上国御用之諸反布調方等、不行届段申出、無拠相聞得候付、別条之御取分ケを以、員数減少ニ而御所帯方・御用意方より銭四万貫文、都合八万貫文拝借被成下候間、農具并反布調方之諸道具、則々仕立方を以相渡シ急度疲労立直り年貢・諸上納物者勿論江戸立、御上国御用諸反布等、全相弁候様精々可被致下知旨、御差図ニ而候、以上、

丑
二月

桃原親方　　富島親方　　」

[16]

覚

仲里間切

一銭三千六百貫文

斤ニ九貫文ツヽ
釘四百斤、

一同弐千八百貫文

斤ニ拾四貫文ツヽ
錠弐丁、斤ニ〆弐百斤、
一同五百六拾貫文

斤ニ八貫文ツヽ
はせをうくたう縄弐筋、斤ニ〆七拾斤、
一同六百四拾貫文

斤ニ八貫文ツヽ
同ミ縄弐筋、斤ニ〆八拾斤、
一同千五百貫文
大工壱人仕手細工壱人弐人ニ而作事日数三拾日、往還廿日、〆五拾日分、手間籠ル、
外、仕手細工九人、間切より出ル、
一銭百弐拾貫文、
上茶拾斤、
但、六行、六反帆船壱艘作事入め料、
一銭弐千四拾貫文、

壱ツニ拾七貫文ツヽ
ふとき百弐拾ツ、
一同千五拾貫文、

匁ニ五貫文ツヽ
筋糸弐百拾玉、
一同三百五拾貫文、

斤ニ七貫文ツヽ
あい玉五拾斤、
一同千三百五拾貫文、

斤ニ五貫百文ツヽ　御定代
蘇木弐百五拾斤、
一銭四拾貫文、

斤ニ壱貫三百五拾文ツヽ　御定代
明はん三拾斤、
一同七百拾五貫文、

斤ニ五貫五百文ツヽ
千おきん百三拾斤、
但、六行御用布調用之諸品并染具代、
一同七千四百弐拾五貫文、

刃ニ四拾五貫文ツヽ
唐鍬百六拾五刃、
一同七百九拾弐貫文、

刃ニ拾壱貫文ツヽ
鉾七拾弐刃、
一同千弐百六拾貫文、

刃ニ四拾五貫文ツヽ
鋤のミ弐拾八刃、
一同壱万九千六百貫文、

疋ニ七百貫文ツヽ
男牛弐拾八疋、
一同三万三千七百五拾貫文、

疋ニ四百五拾貫文ツヽ
女牛七拾五疋、
但、五行農具仕立用、
一銭七百弐拾貫文、

壱ツニ三拾貫文ツヽ
木棉さねはなし弐拾四ツ、
〆銭七万八千三百拾弐貫五百文、

具志川間切

一銭三千六百貫文、　斤ニ九貫文ツヽ
釘四百斤、

一同弐千八百貫文、　斤ニ拾四貫文ツヽ
錠弐丁、斤ニ〆弐百斤、

一同五百六拾貫文、　斤ニ八貫文ツヽ
はせをうくたう縄弐筋、斤ニ〆七拾斤、

一同六百四拾貫文　斤ニ右同
同ミ縄弐筋、斤ニ八拾斤、
一同千五百貫文
太工壱人、仕手細工壱人、弐人ニ而作事日数三拾日、往還廿日、〆五拾日分、手間込ル、
外、仕手細工九人、間切より出ル、
一銭百弐拾貫文、　上茶拾斤、
但、六行、六反帆船壱艘作事入め料、

一同千三百六拾貫文、　壱ツニ拾七貫文ツヽ
ふとき八拾ツ、

一同七百貫文、　匁ニ五貫文ツヽ
筋糸百四拾玉、

一同弐百三拾八貫文、　斤ニ七貫文ツヽ
あい玉三拾四斤、

一同九百拾八貫文、　斤ニ五貫四百文ツヽ
蘇木百七拾斤、

一同弐拾七貫文、　斤ニ壱貫三百五拾文ツヽ
明ばん弐拾斤、

一同四百四拾貫文、　斤ニ五貫五百文ツヽ
千おきん八拾斤、
但、六行御用布調用諸品并染具代、

一同五千弐百六拾五貫文、　刃ニ四拾五貫文ツヽ
唐鍬百拾七刃、

一同九百九拾貫文、　刃ニ拾壱貫文ツヽ
鉾九拾刃、

刃ニ四拾五貫文ツヽ
一同千八百四拾五貫文、　鋤のミ四拾壱刃、

疋ニ七百貫文ツヽ
一同弐万千貫文、　男牛三拾疋、

疋ニ四百五拾貫文ツヽ
一同弐万八千三百五拾貫文、　女牛六拾三疋、
　但、五行農具仕立料、

壱ツニ而三拾貫文ツヽ
一同五百四拾貫文、　木棉さねはなし拾八ツ、
　但、所用、
〆銭七万八百九拾三貫文、
合拾四万九千弐百五貫五百文、
右両間切船作事料并御用布調用之諸品、又ハ農具仕立料取立如斯御座候、以上、

丑
正月　　久米具志川間切大掟　山元にや　　同首里大屋子　喜久里筑登之
　　同地頭代　上江洲親雲上　　仲里間切大掟　宇江城にや
　　首里大屋子　比嘉筑登之　　同地頭代　宇江城親雲上

右之通相違無御座候、以上、

丑
正月　　久米具志川間切在番筆者　具志堅筑登之親雲上　　仲里間切在番筆者　具志堅筑登之親雲上
　　具志川間切在番　大田里之子親雲上　　仲里間切在番　与那覇里之子親雲上
　　鉢嶺親雲上

[17]
　下　覚
色筋糸拾壱斤者
　匁ニ壱貫三百八拾九文ツヽ
　　代銭弐百弐拾弐貫三百文、
右ハ当島御用紬織り調用ひや糸之儀、おり人共手前ニ而相調申事御座候処、頃年一統及困窮ニ候上、江戸立御用御上国御用太分之紬調方被仰付、過分之ひや糸何分ニも自力ニ而亘相調御座候間、何卒本行之員数代付之通ニ而代銭差替所望被成下度奉願候、此旨宜様御取成奉頼候、以上、

丑
正月　　具志川［間切］地頭代　上江洲親雲上　　仲里間切地頭代　宇江城親雲上

右申出之通御達被下度奉存候、以上、

丑
正月　　鉢嶺親雲上

[18]
　上　覚　　久米仲里間切

正頭百三拾八人、壱年三百五拾四日ニ而取立
夫四万八千八百五拾弐人、

右之内

在番水夫
一夫三百五拾四人

大和横目右同
一同三百五拾四人

大さはくり両人、六人ニ而
一同三百六拾人、

掟拾人、右同弐拾人ニ而
一同千弐百人

蔵筆者免夫拾弐人ニ而
一同七百弐拾人、

島文子拾人、右同弐拾人ニ而
一同千弐百人、

御殿々内筆算稽古六人、右同六人ニ而　船筑六人、右同六人ニ而
一同三百六拾人、

定佐事六人、右同六人ニ而
一同三百六拾人、

右同夜仕事用明松取拾五人ニ而
一同五千三百拾人、

御殿々内御歳暮并文御遣薪木取
一同拾人

在番以下役々歳暮并文遣炭焼用
一夫百弐拾八人、

蔵元たい竹取用
一同三百五拾四人

水道さらい夫三千三百五拾人之内
一同千百拾七人、

定加子拾六人免夫拾六人ニ而
一同九百六拾人、

右同染具取用
一同六百六拾六人、

右同諸道具調用
一同六拾九人、

奉公人并正頭迦
外九千六百人、

右同
外千弐百人、

唐船用意縄弐房調夫
一同百三拾八人、

右同之時大薪木取用
一同百弐拾人、

筆者右同
一同三百五拾四人

地頭代免夫、四人ニ而
一同弐百四拾人

惣耕作当両人、四人ニ而
一同弐百四拾人、

目差拾人、右同弐拾人ニ而
一同千弐百人、

染物文子六人、右同拾弐人ニ而
一同七百弐拾人、

若文子拾人、右同拾人ニ而
一同六百人、

右同六人ニ而
一同三百六拾人、

拾ヶ所下遣弐拾人ニ而
一同七千八拾人、

右同たい竹取拾人ニ而
一同三千五百四拾人、

右同炭焼用
一同弐拾四人、

右同薪木取用
一同三百弐拾人、

右同炭焼用
一同七拾弐人、

奉公人并正頭迦
外弐千弐百三拾三人、

染屋薪木四千束取用
一同千人、

右同かま作り用
一同五拾五人、

諸御用達千八百賦調夫壱万四千四百人之内
一同四千八百人、

官蔚御用物并歳暮御捧物調夫千八百人之内
一同六□百人、

地頭代并夫地頭五人〆六人、年二弐度之遣夫、
一同百六拾六人、

帰唐船之時両遠目番詰夫弐人ツヽニ而
一同百弐拾人、

右同上下走出之時挽舟用意
一同弐百七拾六人、

右同警固舟加子六人日数廿日二而
一同百廿人、

御歳暮立便より加子七人、日数六拾日二而
一同四百弐拾人、

御用布立便より右同八人日数七拾日二而
一同五百六拾人、

新米立便より七人日数五十日三度二而
一同千五拾人、

五六月両度御祭之時日覆作并神道作用
一同弐百七拾六人、

二八月両度殿内参之時神酒并会釈調用
一同六拾人、

嶽々ふさげ用
一同百三拾八人、

異国火立所作用
一同拾五人、

二八月両度原御廻見之時
一夫弐百七拾六人、

年中遊日八日二而、但此日道々修補仕候
一同千百四人、

諸免夫并水夫賄持
一同九百七拾五人、

〆男夫四万五百拾壱人、

残而、八千三百四拾壱人、但壱人二付年中二三拾人四分四り、壱ヶ月二五日四分四り完、外在番・大和横目・筆者御代合付水夫并宿賃夫、又八宿修補水屋作り夫除ク、

久米具志川間切

正頭四百人、壱年三百五拾四日二而取立
夫四万九千五百六拾人、

右之内

在番水夫
一夫三百五拾四人、

同筆者右同
一同三百五拾四人、

勤番右同八ヶ月分
一弐百三拾六人、

君南風伜者壱ヶ年分
一同百弐拾人、

地頭代免夫四人二而
一同弐百四拾人、

大さはくり両人、右同六人二而
一同三百六拾人、

惣耕作当両人免夫四人二而
一同弐百四拾人、

掟九人右同拾八人
一同夫千八拾人、

目差拾人右同拾八人二而
一同千八拾人、

島文子九人、右同拾八人二而
一同千八拾人、

蔵筆者六人、右同拾弐人二而
一同七百弐拾人、

若文子九人右同九人二而
一同五百四拾人、

船筑六人、右同拾弐人二而
一夫七百弐拾人、

定加子六人、右同弐拾人二而
一同七百弐拾人、

定佐事六人、右同拾弐人二而
一同七百弐拾人

木細工九人、右同拾八人二而
一同千八拾人、

在番水夫并役々以下諸免夫壱万弐百拾四人賄持拾人二而壱人引合
一同千弐拾四人、

升取両人ツヽ年中七百八拾人賄持右同
一同七拾壱人、

九ヶ所佐事壱人下遣壱人、〆弐人ツヽ二而
一同六千三百七拾弐人、

九ヶ所夜仕事二付明松取用
一同四千六百弐人、

右同焼用たい竹取用
一同三百拾九人、

右同炭焼用
一同七拾人、

御殿々内御歳暮炭并薪木用
一同拾六人、

在番以下役々歳暮并文遣炭焼用
一同百弐拾六人、

秋満さらい夫三千五百弐人之内
一同千百七拾四人、

奉公人并頭迦りより而出ル
外、弐千三百四拾八人、

右同染具取用
一同三百四人、

右同賭道具調用
一同六拾九人、

歳元右同
一同三百五拾四人、

殿内文御遣薪木并たん焼用
一同八人、

右同薪木取用
一同三百拾四人、

染屋薪木弐千六百六拾六束取用
一同六百六拾七人、

右同かま作り用
一同弐拾五人、

賭御用遠（遣カ）千弐百拾壱枚□二八人
調二而九千六百人之内
一同三千弐百人、

奉公人并頭迦りより出ル
外、□千四百人、

官蔣御用物并歳暮御捧物調用千八百七拾五人之内
一夫六百弐拾五人、

奉公人并頭迦より出ル
外、千弐百五拾人、

地頭代并夫地頭五人、年二弐度夫遣
一同百八拾七人、

右同之時大薪木取用
一同百弐拾人、

御用布立便より同八人、日数七拾日二而
一同五百六拾人、

五六月両度御祭り之時日覆作り并神道作り用
一同弐百八拾人、

二八月両度御殿参之時神酒并会釈調
一同六拾弐人、

嶽々ふさけ用
一同百四拾人、

二月両度原御廻見之時
一同弐百八拾人、

唐船用意縄弐房調用
一同百四拾人、

帰唐船之時両遠見番所詰夫壱ヶ月分
一同九拾人、

右同登下走出之時挽船用
一同弐百八拾人、

新米立便より右同、七人五拾日三度二而
一同千五拾人、

右同之時君南風かぐかき用
一同四人、

異国火立所作り用
一同拾五人、

年中遊日八日二而、但此日道々修補仕候
一同千百弐拾人、

〆男夫三万四千四百四拾八人、

残而、壱万五千百拾弐人、

但、壱人二而年中百八手間、壱ヶ月八九手間ツヽ、

外在番并筆者勤番御代合之時、宿賃夫、水夫、宿修補、又八水屋作り夫除ク、

右両間切年中夫出取立如斯御座候、以上、

丑　　両間切
二月　　大さはくり　　地頭代
右之通相違無御座候、以上、

丑
二月　　鉢嶺親雲上

[19]
口上覚
かすり・嶋・白紬八百九反、
外千弐百七拾壱反、
右ハ恐多御座候得共申上候、当島之儀近年人居太分相減年増疲行、年貢諸上納物未進差屯、御用布御用物調兼、年々追送を以漸上納仕候躰二而、百姓極々及叵儀申候、江戸立并
中城御殿御上国御用之御反布諸御用物も太分之御調文高二而、年二三百五拾四日之日数を以御用布仕手女之頭高二割合仕候得ハ、千四百九拾九反之調高二而候処、其内織り人共病気其外何歟差支之儀共有之候節ハおのつから反数引入申筈二而、頭二三百日之日数を以積立候へハ外書之反数相当、至極驚入居申候、依之願申上候儀、近比御都合之程も如何敷恐入候得共、前文之次第被聞召分疲労之間切御憐愍之御取計を以、成合申儀御座候ハヽ、御所帯・御用意御方御調文之内、御用柄御見合□本行之員数御減少被仰付被下度奉願候、御両所御用物之儀も格別成御用之段ハ乍存、ヶ様申上候儀別而恐多奉存候得共、疲間切殊二不人足之事二而先様御調文高、全調達叵仕段ハ乍見及、何分不申上、自然調不足相成、其期二至り何角申上候而ハ猶以其恐不少候故、不得止事、此等之段御訟申上事御座候条、疲労之間切此涯御救二被思召上、何卒願之通御許容被仰付被下度偏二奉願候、為御見合別紙賦書取添差上申候、可然様御取成被仰付可被下儀、奉頼候、以上、

丑　　両間切
二月　　役々
右申出之通、両間切近年人居太分相減、定式御用紬をも年々追送を以漸上納方間を合候躰御座候処、江戸立并中城御殿御上国御用之御反布相重候二付而ハ、先様家業之働も届兼、依躰ハ及飢二□□合茂相成可申哉与至極心配仕申事御座候間、疲労之間切御救之一筋を以、何卒願筋御達被下度奉存候、以上、

丑　　両間切　　右同
正月　　筆者　　在番
鉢嶺親雲上
右願出之通両間切之儀、人居少ク年貢之働懸而江戸立并御上国御用不及手式段見及申候間、願筋御取持被下度奉存候、以上、

丑　　両間切
正月　　惣地頭

[20]
覚
定式御用かすり・嶋・白紬千百五拾反、江戸立御用同弐百八反、御上国御用同七百弐拾四反、〆弐千八拾反之内
かすり・嶋・白紬千弐百七拾壱反、　　外八百九反
但、両間切女夫四百弐拾三人五分、壱人二付一日二おり例上中下押入壱尺五寸、紡例同壱匁五分二而、日数三百日一日二三反完調得、

外、蚕子飼立并取切結手間ハ悉ク難取立候付除ク、

染具取用
一男夫九百七拾人、

右同薪木取用
一同千六百六拾七人、

右同かま作り并道具仕立用
一同百八拾八人、

村々夜仕事ニ付明松取用
一同九千九百九拾弐人、
〆男夫壱万弐千七百三拾七人、
右両間切年中御用布調織り如斯御座候、以上、

丑
正月

両間切
大さはくり　地頭代

右之通承届相違無御座候、以上、

丑
正月

両間切
筆者　鉢嶺親雲上

[21]

口上覚

恐多御座候得共申上候、当島御用紬調方之儀、康熙二十九年識名親方御渡海之節、白紬壱反、長八尋、幅壱尺六寸仕立、現入目代米壱石弐斗弐升五合六勺之内、紬定代五斗九升引候而入過之分六斗三升五合六勺、御用布仕綿子代并仕手間米、現上納綿子代米より割下ケを以御定代相立候故、綿子代相減り候付、めんす調方之故障ニ相成候間、紬定代之内仕綿子代百目ニ弐斗五升之積を以致付届、残分ニ而仕手間相渡候様被仰付度旨、乾隆三十四丑年与世山親方御検使之御時、両間切ニ而奉訟候付、弥願通被仰付置候、然者当島之儀其時分迄八頭高多罷居、蚕子手広飼立御用之外紬・めんす過分売上、諸上納物も無滞涯々上納為仕由御座候処、其後漸々頭高相減及難儀候付、□(去カ)十三子年西平親方御検使之御時、紬・めんす代上之願申上候処、寅年より午年迄五ヶ年願通難有仮御定代被仰付、上代之分ハ未進穀ニ御引合、島中大粧為筋相成候付、猶一往年延之願為申上事候得共、御取揚無御座、其以来猶以人居太分相減、蚕子飼立且農業之働方も不行届、島中一統窮迫成立、諸上納物過分致未進候上、御用紬・めんすも不相調得、年々五六百把余拝借を以御用相弁候次第ニ而、毎度逢御懸引残念至極恐入奉存候、且又御用紬調方ハ女之仕事与乍申、染具・薪木ハ男夫請持ニ而男女昼夜之働を以漸調上申仕合御座候処、追々江戸立并御上国御用御反布太分之御手形入相重、当分之振合ニ而ハ如何可相調哉与礒与驚入居申事御座候、依之願申上候儀御成合之程如何敷千万恐入奉存候得共、御用紬仕賃米之儀当分之御定代ニ而ハ及迷惑申事御座候条、相労居候百姓共御救ニ被思召上、何卒来年より先戌年迄拾ヶ年別紙之通仕賃米相重、仮御定代被仰付被下度我々始百姓共至迄偏ニ奉願候、此等之趣御都合宜様御取成被仰上可被下儀奉頼候、以上、

丑
正月

両間切
大さはくり

右同
地頭代

右申出之通、両間切共疲入定式御用紬をも男女昼夜相働漸追送上納仕候次第ニ而、家業之働方も不行届、極々難儀之折柄江戸立并御上国御用之御反布相重候付、此涯御心付無之候而ハ所中難相立躰見及、至極心配仕事御座候間、何卒別紙之通一往御取持被仰付被下度奉存候、以上、

丑
正月

具志川間切筆者
具志堅筑登之親雲上

鉢嶺親雲上

仲里間切同
具志堅筑登之親雲上

[22]

覚

一拾七升白紬壱反、長八尋、幅壱尺六寸、
代米八斗壱升三合八勺起、

内　重代 弐斗弐升三合八勺起、

下

一拾七升かすり紬壱反、長幅右同、
代米壱石四斗三升弐合八勺弐才起、

内　重代 三斗三升五合三勺弐才起、

上

一拾七升嶋紬壱反、長幅右同、
代米九斗三升六合弐勺九才起、

内　重代 弐斗六升壱合弐勺九才起、

右御用紬代米取立如斯御座候、以上、

丑
正月　　両間切 大さはくり　　右同 地頭代

右之通見届申候、以上、

丑
正月　　鉢嶺親雲上

右通両間切之儀、多年疲入年貢諸上納物調兼及難儀候付、御用紬代上之願申出有之候、然者両間切之儀先年御検使与世山親方渡海之比迄八両間切二而人居八千三百人余罷居候上、御用紬八僅計二而御模通八月より相調、其上御用之外紬・めんす等過分売上、一統安堵二罷在為申由候処、其以来連々人居相減至当分二八弐千余之内正頭九百人余二相成、年貢諸上納米壱人二付四石余相当極々難儀之折柄二而、御用紬八以前二相替太分相重候付、御模月限通二八不相調得、男女共昼夜之働を以漸追送上納仕候躰二相成、夫故蚕子飼立農業之働方不行届、年増疲労之方二成行候模様相見得候由、右付而八何れ之筋此涯御心付無之候而八江戸立并御上国御用之御反布御用物弁達方不罷成躰二而、至私共二も至極心配仕事御座候間、別紙之通疲労立直り候迄之間、一往願通被仰付度奉存候、以上、

丑
正月　　故仲里按司名代 徳嶺筑登之親雲上　　浦添王子大親 渡口親雲上
　　富川親方　　西平親方

[23]

口上覚

此表御取持被成候事、

恐多御座候得共申上候、当間切御在番大田里之子親雲上御事、当十二月御勤年数筈合御交代之筈御座候処、大田御事去年御渡海以来農業方を始諸上木仕立方、又八蘇鉄并田芋植付方、其外諸事被附御気被成御下知候付、百姓中能汲請出精相励、且当間切之儀毎度飯料続兼及難儀候處、鉢嶺・大田御両人御下知を以、当三月より九月迄五万坪余開地芋ケつら植付方被仰付置候付、最早飯料取続罷在、今躰二而八追々

潤立可申与農業方折角出精相励申事御座候、依之御訟申上候儀千万恐多奉存候得共、右式御下知を請農業方出精相働候最中ニ而、究境之時節御座候処、此節被成御代合、夫々之御下知方反覆仕候而ハ甚差支候儀も可致出来哉与、至極心配仕居申候故、件之次第別段之御取分ヶを以何卒今一詰勘越被仰付被下度偏ニ奉願候、此等之趣を以何分ニも可然様御取成可被下儀奉頼候、以上、

子
十二月　　久米具志川間切大田目差　上江洲にや　　同嘉手苅目差　与世山にや　　同当銘目差　安村にや

同西銘掟　上江洲にや　　同具志川掟　内間にや　　同地頭代　上江洲親雲上

右之通願出候付、登合之役々委曲承届候処、万端気を附致下知、農業方出精相働させ所中為筋相成候由申出、今躰ニ而ハ先様引起候模様相見得、大田此涯致代合候而ハ夫々之手組連続不致、差支候儀も可致出来与存申候間、別段之御取分を以願之通被仰付被下度奉存候、以上、

子
十二月　　浦添王子大親　渡口親雲上　　西平親方

[24]

口上覚

江戸立御用
一綿子五百五把、
内、三百三把 仲里、　　弐百弐把 具志川

右同紬・綿子五百五拾八把九匁八分八り之内拝不足
一同拾四把九匁八分八り、　　仲里

先達而被下置候
外、百四拾四把、

右同百五把三拾九匁九分弐り之内右同
一同九把三拾九玉九分弐り、　　具志川

右同
外、九拾六把、
〆綿子五百弐拾八把四拾九匁八分、
内
三百拾七把九匁八分八り、　仲里
弐百拾壱把三拾九匁九分弐り、　具志川

右者恐多御座候得共申上候、来寅年江戸立ニ付御進上・御進覧御用紬・綿子之儀、来夏便迄皆同積登上納仕候様、御調文を以被仰渡置候處、当島之儀頃年津波・旱魃等之逢災変ニ、一統極々疲入候上、津波以来桑及憔悴ニ、蚕子飼立方段々行届不申、多分綿子致不出来、定式諸御用紬調綿子をも毎度拝借之願申上、漸追送を以御用布相調来候故、出産之めんすニ而ハ御用匡相弁次第ニ而、御免被仰付置度旨、先達而為奉訟事候処、久米島綿子ニ限御用之由ニ而御取持無御座、至極差迫居申候、依之願申上候儀、近比御成合之程ニも如何敷奉恐入候得共、件之次第別段之御取計を以何卒拝借被成下度奉願候、左様被仰付被下候ハヽ右めんすニ而定式御用紬相調させ、現綿子御用之儀ハ島元出産を以晒方仕させ、来夏堅固ニ上納可仕候、且又最初拝借被下置候仕めんす拝不足之儀も前文之次第ニ而、別ニ差足候手術不相見得、至而差支申候間、是又一同拝借被成下度奉願候、此等之趣宜様御取成可被下儀奉頼候、以上、

子
十二月　　久米具志川間切嘉手苅目差　与世山にや　　同西銘掟　上江洲にや

同具志川掟
内間にや

同仲里間切真謝掟
上江洲にや

同大掟
宇江城にや

具志川間切地頭代
上江洲親雲上

仲里間切地頭代
宇江城親雲上

右申出之通、めんす致不出来、定式御用紬・調めんすをも毎度拝借を以漸御用之間を合候躰ニ而、繰替不仕八大切成御用叵相弁、且最初拝借被下置候仕綿子不足等も差足候儀不罷成、差支申候間、何卒願通御口達被下度奉存候、以上、

子
十二月

具志川間切筆者
具志堅筑登之親雲上
鉢嶺親雲上

仲里間切筆者
具志堅筑登之親雲上

[25]

○覚

一米五百七拾石八斗七升八合壱勺七才起、
内
納ル
四百四拾石五斗弐升九勺五才起、
残而
百三拾石三斗七合弐勺弐才起、

年貢高不納
一雑石弐拾八石六斗八升五合八才起、

御用意
一米三拾六石八斗六升三合七勺起、
右、仲里間切、

一米四百六拾九石九斗六升七合三勺八才起、
内
納ル
四百弐拾三石八斗三升壱勺四才起、
残而
弐百四拾六石壱斗三升七合五勺四才起、

年貢高不納
一雑石五拾九石九升八合六勺九才起、

御用意
一米三拾九石八斗五合九升八才起、
右、具志川間切、

[26]

〇請取

越前綿子九把三拾九匁九分弐り、

右江戸立御用之紬調方、重拝借として慥ニ如斯御座候、以上、

丑　　久米具志川間切登合之

正月　　役々

[27]

證文

久米両間切未進上納賦書之儀、来春之間御延被仰付難有奉存候、依之下島之上来春無間違賦書を以差上可申候、為後證為無相違如斯御座候、以上、

子　　両間切

十二月　　地頭代

右之通承届相違無御座候、以上、

子　　両間切

十二月　　筆者　　鉢嶺親雲上

[28]

口上覚

「此表御訟申上候処、自然向々美代銭引合方相滞儀ニも候ハヽ其訳帳当御方江申出候様御差帰シ候事」

乍恐申上候、当島之儀年々　上々様御召御用かすり・島・白紬之儀、直上納仕来候処、美代銭拝下方段々催促仕候得共、無期日御渡方無之、長々日数を込候故、毎度首里・那覇往還手隙之費不及申ニ、旅先長々滞留ニ而はん料彼是迷惑仕居申候、依之奉訟候儀、御都合之程も如何敷深重恐入奉存候得共、離小島件之次第別条之御取分ケを以何卒年々御用物座江直ク上納仕候様被仰付被下度奉願候、此等之趣を以可然様御取成可被下儀奉頼候、以上、

子　　両間切

十二月　　地頭代

右申出之通美布代銭急ニ渡方無御座所より宰領長々滞在ニ而及迷惑候間、願通御用物座江直上納仕候様被仰付被下度奉存候、以上、

子　　筆者

十二月　　亀谷筑登之親雲上　　鉢嶺親雲上

[29]

〇證文

御殿御免銀御延之儀、皆同調方を以上納可仕之處、近来旱ニ付而ハ繭致不出来、大切成御用及不納、段々御懸引之趣何共可申上様無御座、至極恐入奉存候間、何卒来年四月之間御延被仰付被下度奉存候、左様［無脱カ］御座候ハヽ其御咎目可被仰付候、為後証如斯御座候、以上、

子　　両間切

十一月　　地頭代

[30]

綿子五百五把

内　三百三把　仲里　　弐百弐把　具志川

右者恐多御座候得共申上候、来寅年江戸立ニ付御進上御進覧御用并浦添御殿御所望といて本行之員数、来夏便迄皆同積登上納仕候様、御調文を以被仰渡置趣御座候付、此程調方段々為尽吟味事御座候得共、当島之儀頃年津波旱魃等之逢災変、一統極々疲入候上、津波以来及憔悴ニ蚕子飼立方段々行届不申、多分綿子致不出来、定式御用紬調綿子をも毎度拝借之願申上、漸追送を以御用布相調上納仕来候処、島元出産之綿子ニ而ハ御用弁候儀相見得不申次第ニ而、右御用綿子御免被仰付度旨、先達而奉訟候処、久米島綿子ニ限り候（而カ）御用之由ニ而御取持無御座、至極差迫居申候、依之頼申上候儀近比御成合之程も如何敷深重奉恐入候得共、何卒別段之御取合を以本行之員数拝借被成下度奉願候、左様被仰付被下候ハヽ、御用紬之儀右拝借綿子ニ而相調、島元出産を以晒方仕させ、来夏堅固ニ上納可仕候条、此趣宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子十二月

久米具志川間切嘉手苅目差　与世山にや

同西銘掟　上江洲にや

同具志川掟　内間にや

同仲里間切真謝掟　上江洲にや

同大掟　宇江城にや

両間切　地頭代

右申出之通、両間切共極々疲入候上桑及憔悴ニ、年々綿子致不出来、定式御用紬をも毎度拝借を以漸御用之間を合申躰ニ而、繰替不仕ハ大切成御用巨相弁躰見及候間、何卒願之通御達被下度奉存候、以上、

子十二月　鉢嶺親雲上

右申出之通承届相違無御座候間、願之筋御達被下度奉存候、以上、

子十二月

古仲里按司名代　徳嶺親雲上　富川親方

浦添王子大親　渡口親雲上　西平親方

[31]

「此表御断相済候事」

口上覚

浦添御殿
一綿子弐拾五把

国吉殿内
一同弐拾五把

〆綿子五拾把

右ハ恐多御座候得共申上候、来寅年江戸立ニ付、［以下、後欠］